

「お年寄り、子どもに優しいまち」に

小説家

諸田玲子さん

Reiko Morota



経歴

静岡市葵区生まれ。県立静岡城北高校卒業。上智大学文学部卒業。外資系企業勤務、テレビドラマのノベライズや翻訳などを手掛けた後、1996年、「眩惑」(ラインブックス)で作家デビュー。

2002年、「あくじゃれ瓢六」(文藝春秋)で第126回直木賞候補、03年、「其の一日」(講談社)で第24回吉川英治文学新人賞、07年、「奸婦にあらず」で第26回新田次郎文学賞、12年、「四十八人目の忠臣」(毎日新聞社)で第1回歴史時代小説作品賞。今年4月、東京・明治座で著書「きりぎり舞い」上演。
<http://www.r-morota.net/>

女性の視点で大胆発想

40歳手前で今の道を選んだ。時代小説を得意とする。平安朝から昭和の時代まで幅広く研究し、「其の一日」「奸婦にあらず」「お見女房」などの代表作をはじめ作品は60冊を超え、人気作家の一人として活躍中だ。今年7月まで日本経済新聞に、清水港にある船宿の女主人公の悲恋を描いた「波止場浪漫」を連載、大きな反響を呼んだ。「時代物」というと、戦国時代などの歴史

事件や人情長屋ものが一般的ですが、私はそれ以外のジャンル、人間を掘り下げてみたり、ミステリーにしたりするのが好きですね。知識が積み重なっていくのもっとこを書きたいとか、どんどん広がるんですね。現代ものと変わらない楽しさ、面白さがあります」と諸田さん。

人間の心理、特に男と女の微妙な心理を巧みに描く。「書き尽くされていても、皆さんが書かない視点や、女性の目でもう一度書き直す。大胆な発想、読んでいてワクワクする、次のページをめくりたい、そんな小説を目指して書いています」。

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

学べる歴史の宝庫

「波止場浪漫」の他、「坐漁の人」「月を吐く」「お順」など、静岡や清水を舞台にした作品も数多く手がけ、仕事でもたびたび静岡市を訪れる。

「観光地がどうのこうのではなく、静岡市の特長、例えばお茶の香りがする街とか、小さなことでも何か他の都市と違うと感じるものがほしいですね」。

毎夏、清水区で少年少女のサッカー全国大会が開催される。「サッカーに限らず、子どもを集めるイベントや大会みたいなものに積極的に取り組んでみては?きつと将来、住みたいと思ってくれるはずですよ」とし、医療・福祉、教育の充実を図り、「お年寄りと子どもに優しいまちをアピールするのかもしれないと思います。次の世代につながる話です」と指摘する。

歴史小説家の目線で「静岡は歴史の宝庫。東京からも近いし、子どもたちが歴史を学びに来れる所です。それをどうやって見せるか、企業と一体化して、企業にも還元されるような方法を検討してみたいかがでしょう」と、歴史遺産の有効活用も促す。

来年1月31日に「波止場浪漫」出版を記念して清水区の清水マリンビルで千人規模のイベントを開く。

(文:長田義明、写真:諸田氏提供)